

判定に依ると、ナガラハーラの位置はシムソンがスールク・アブ Sourkh-Ab 川とカーブール川との落合と言つた (Journal of the Royal Asiatic Society of London. 一八八一年、一八四頁。余は此の記事の寫一通を印度考古學館次長スプーナー D. Brainerd Spooner 博士の厚意によつて手に入れた) それよりも遙にヂェララバードに接近することになるが、マツソンの地圖では兩者の中間、即ち彼れの所謂「ベグラーム」に指示してある。斯様な相違の生ずる所を以て見ても、余が最前注意した通り、谿谷の隅々が皆何等かの理由で注目せられ又綿密に調査せらるべき價值あるものたるが立派に證明される。各々相違する此の三つの主張の孰れが正しいかは發掘の結果に依つて定められることであらうが、少しく達觀すればそれを待つまでもなく、ナガラハーラの假定位置は實際位置から數吉米突以上離れては居らぬと考へられるもので、余の究研せんとする立派法師の徑路決定には此の概定だけで充分である。猶ほ是れ以上、ダツカ Dalka を通りカイベル Khaiber 峠を越えてペシヤワール(富婁沙富羅 Pouroushapoura)に通ずる往來頻繁な街道の方面まで法師の後を追ふ必要はない。只